

[研究ノート] フィリピン語の讃美歌シリーズ Papuri ! 及びそのテキストの傾向についての試論

宮脇聡史

(大阪大学大学院言語文化研究科専任講師)

1. フィリピン語のオリジナル・プレイズ Papuri !

フィリピンの福音派諸教会は活況を呈している。センサス等のデータでははっきり見えにくいものの、フィリピン福音主義教会連盟などの把握する教会数の劇的な増加からは、福音派諸教会、及び教会員の飛躍的增加はほぼ明らかと思われる¹。

教会の礼拝において耳を引くのは、先ずはグローバルに広がるプレイズ・アンド・ワーシップ（以下プレイズ）と呼ばれるスタイルの浸透であるが、それと同時に興味深いのは、現地語の固有の讃美歌が楽しげに、元気に、力強く歌われていることである。この傾向はカトリック教会でも見られるが、これも一方ではカトリック教会の典礼刷新の流れ²の中でのことであるとともに、他方でカトリック、プロテスタント双方を含む「ボーンアゲイン」と呼ばれるカリスマ刷新的な運動の中でのプレイズの影響も看過できない³。

福音派におけるフィリピン語プレイズのけん引役となったのは、キリスト教放送局 Far Eastern Broadcasting Company, Philippines (FEBC) の番組 Papuri ! (讃美!) である。現在 Papuri ! 自体のアルバムとして 20 巻を数えるに至っており、関連のアルバムや、カバーアルバムなども多数発売されている。

筆者の研究の中心はフィリピンにおける民族意識と宗教の関係であり、特にカトリック教会の教会アイデンティティとフィリピン・アイデンティティの相克を公文書の分析と動向分析を照らし合わせることで明らかにする、というものであった。

1 福音派の興隆について学問的な報告は少ないが、例えば Aragon (2001: 369-389) を参照。

2 第 2 バチカン公会議 (1962-65) に基づき、世界的に進められた典礼刷新はフィリピンにも及び、ミサ典礼の現地語化や会衆参加を含む刷新がすすめられた。

3 フィリピン・プロテスタントの音楽の動向については、Navaro (2001: 451-462) を参照。

但し、筆者自身が特に 1998-2000 年にアテネオ・デ・マニラ大学付属フィリピン文化研究所 (Institute of Philippine Culture, Ateneo de Manila University) の客員研究員として滞在した折に、自身の信仰生活のために関わっていた福音派教会の動向にも関心を持つようになった。そしてフィリピン福音派諸教会の中にある、社会文化や政治に対してキリスト者として応答する形をさまざまに模索する姿から、多くを触発されてきた。さらに音楽鑑賞を趣味とし、教会の聖歌隊にも積極的に参加した筆者にとって、この 2 年の滞在は、音楽観、礼拝観、教会讃美観を根本から問い直される新鮮な経験でもあった。

2001 年に日本の福音派唯一の神学大学たる東京基督教大学で教員生活を始めたこともあり、フィリピン福音派については学会発表や論文公表などには至ることはなかったものの、サブテーマとして常に意識し材料を収集するよう努めてきた。2011 年 3 月に東京基督教大学の専任教員を辞し非常勤となった今、日本とフィリピンの福音派教会及び教育機関との幸いで建設的なかわりに対する感謝の思いを込めつつ、なお断片的ではあるが、これまでの知見の中から「論文」とまではいかないが「研究ノート」という形で多少なりともまとめ、公表する次第である。

2. Papuri! プログラム・アルバムの経緯

Papuri! のオフィシャル・サイトには、経緯について次のような説明がある。

1970 年代は、国際的な歌手グループ、英語の讃美歌とゴスペル・ソングの広がりに伴い、フィリピン音楽、そしてキリスト教の西洋化の時代となった。

じわじわと迫るフィリピンのミュージック・シーンの外国支配を避けるべく、フィリピン放送者連盟 (Kapisanan ng mga Brodkaster ng Pilipinas (KBP)) はすべてのラジオネットワークに 1977 年よりオリジナル・ピリピノ (フィリピン人の／フィリピン語の) 音楽 (OPM) を放映するようにとの通達を出した。当初 FEBC はゴスペル・ソングのフィリピン語版を流すことでこの通達に対応していたが、材料が足りないため、すぐに終了してしまった。もっとフィリピン的なものが必要なのは明らかだった。

1978 年に FEBC は Hymnody プロジェクトを開始した。アメリカ人宣教師ゴードン・イングランド (Gordon England) 博士によるこのプロジェクトは、真に

キリスト教的で、なおかつフィリピン独自の音楽の開発を進めていった。15名の音楽ミニストリーに携わる青年と共に、イングリッド博士は初のすべてフィリピン語によるオリジナルのキリスト教音楽のプロジェクトを開始した。16の歌が選ばれ、そのうちいくつかはよく知られ教会でも広く歌われていたが、新しく書かれたものもあった。

エペソ書第1章の黙想をしている間に、FEBC マニラ局長のエフレン・パリオリナ氏はこのプロジェクトの名前としてタガログ語の「プレイズ」に当たる Papuri ! に行きついた。彼はこのプロジェクトをまとめる3つのCというコンセプトを作り出した。カセット (cassette) テープのアルバムを作ること、楽曲のコード (和音) を記した本 (chordbook) を出版すること、ライブコンサート (concert) をすることである。

初めての Papuri ! のコンサートは1979年10月26日、マニラ市 UN 通りのフィラムライフ劇場で行われ、満席となった。それ以来 Papuri ! は FEBC の音楽部門となり、ラジオ及び公開を通して、教会に仕えるものとなった。

年月を重ねて、Papuri ! の元々の上記3つのCにもうひとつのC、つまり教会 (church) でのプロモーションが加わった。その目的は教会における礼拝で OPM を紹介し、使用を促すことにある⁴。

以上から見て取れるフィリピン教会の状況は以下のとおりである。

教会社会とも英語の歌が優位な状況がまずあり、その中で、フィリピン語賛美歌の運動はフィリピン自体の国語志向の音楽運動と連動していた。そして意外にも、こうした運動がはじめはアメリカ人の指導で進められていることである。

3. 発行状況、及び関連アルバム類

筆者の手元には、現在まで公表されているメインシリーズ全20巻のうち、20巻を除く19巻がある。データがウェブ上にある20巻を含めると、公表年は以下のとおりである。

1 (1979), 2 (1980), 3 (1981), 4 (1982), 5 (1984), 6 (1984), 7 (1985), 8 (1986), 9 (1987), 10 (1988), 11 (1989), 12 (1991), 13 (1992), 14 (1993), 15 (1994)

4 About Papuri at <http://papuri.ph/about-papuri/> 2012年8月1日閲覧

, 16 (1998), 17 (1999?), 18 (2000-1), 19 (2006), 20 (2011) ⁵。15 卷までの発行元は Praise 社であったが、16 卷が Shekinah 社から出され、それ以降は過去のアルバムの CD による再発売も含めて FEBC が直接発行している。それまではカセットが中心であったが、近年の媒体は CD に移行している。上記からうかがえるのは、最初のアルバムが初年より 1994 年まではほぼ毎年一つずつ発行されてきたが、発行元との関係が原因と推測される事情で数年のブランクがあり、そのうち 16-18 卷がほぼ毎年一つずつ出されたが、18 卷が 2001 年に出されたのち、再びブランクができるようになったことである。19 卷は 2006 年発行、20 卷については 2011 年に CD のプロモーションコンサートが行われたことがウェブ上で明らかになっている。以上で概観はできるが、より厳密な形にまとめるため、筆者は近いうちに直接 FEBC の協力を得て調査をする必要があると考えている。

今回はこのシリーズ全体に立ち入った議論はあまりできないが、手元にある限りで把握できるシリーズの推移を概観する。

1-9 卷は基本的に新曲の歌集である。10 卷は 10 周年記念アルバムとなっており、新曲を含みつつ、本シリーズ及び姉妹篇の下記 Sari-Likha シリーズの人気作を新しい編曲で取り上げている。

11 卷からユニークなコンセプト・アルバムが続く。11 卷は Misyon (宣教) と題し宣教をテーマとした新曲が並ぶ。12 卷 Bakit ako Panginoon (主よ何故私が) はキリストの受難から復活までをドラマ化したミュージカル・アルバムである。13 卷 Pinakamamahal kong Bayan! (最愛のわが祖国よ!) では宣教に愛国のテーマが重ねあわされている。14 卷 Labing-Apat na Taong Pagpupuri (14 年間の讃美), 15 卷 Luwalhatiin Ka! (栄光はあなたに!), 16 卷 Patuloy ang Papuri! (讃美は続く!) はこれまでよりもかなりポピュラーソング色の強い軽やかなアルバムとなっているが、特に 16 卷のシンプルでゆったりと南国風に甘美に歌われる作品群は高く評価されたようで、1998 年に Awit Award という音楽賞の宗教音楽部門を受賞している。

とはいえ、方向が劇的に変化するのは 17 卷の Diwang (祝祭) である。グレゴリオ聖歌と DJ とラップの斬新なコラージュやヒップホップ的手法、強烈なビートのダンスミュージックの多用、「詩編にある通り、体中を使い、あらゆる楽器を使って神をたたえてよいのだ!」「フィリピンの人々の言葉で歌う!」というメッセ

5 17 卷は年度の表記がないが筆者のフィリピン滞在中に発行されており、年度は記憶に基づくためクエスチョンマークを付した。

ージを前面に押し出して刺激的な音楽を繰り出し、さらにこれまで文語を多用していたところに口語やスラングを大胆に取り入れた手法も斬新であった。続く18巻ALTA^Rnatibo（代替音楽 [alternatibo] / 地場の礼拝の場 [altar-natibo]）はタイトルにおけることば遊び、これまで讃美の世界でほとんど使われることのなかった山岳民族の伝統音楽の要素をコンピュータを駆使して編集した斬新な冒頭から、フィリピンに深い影響を与えてきたヒスパニックな要素（歌詞の中にもスペイン的な男性性の誇示 [Machismo] の批判が歌われる）を含め、ネイティブ性と現代性（キレのある口語やラップなど）をさまざまな形で追及したこれまでにないものとなった。筆者はこの斬新な実験的アルバムが立て続けに出され、その前衛性の問題（とくに教会での需要／受容の問題）が、カセットからCDへの移行期、著作権と発行元の問題などと絡んで、その後のシリーズの活動を鈍らせたのかもしれない、との見通しを持っているが、この点も今後の調査が必要であると考ええる。いずれにせよ、この時期以降、マニラのレコード屋において、Papuri!を含むフィリピン語の讃美アルバムは急速に店頭から姿を減じ、今はInspirationalのコーナーにはほとんど欧米のアルバムが並んでいる。

FEBCからはSalmo（詩編）シリーズ（私が把握している限りでは1995年の7巻まで）、Sari-Likha（創作）シリーズ（複数巻出たことは確かだが、巻数は把握せず。但し、別会社 [Megamedia Corporation] からコンピレーション・アルバムが出ている）が出ているが、現在はシリーズは続いていない様子である（私の滞在した1998年以降現在まで続きの巻の話は聞かない）。

Papuri!には、4巻物のコンピレーション・アルバムが存在する。1989年の第11巻までの中から選曲したもので、年代の表記はないが、11巻、12巻とこのアルバム集の編曲スタイルの類似、Papuri!流行の時期と重ねると、1990年代前半期と大雑把に推定できる。1998-2000年に私が滞在した時期では、レコード店の中で、価格も含めて一番手の届きやすいアルバムであった。すでに述べたとおり、全体を包括的に捉えるには現状は調査がまだ十分進んでおらず、資料収集にも課題が残り、また誌面の制約もある。そこで、当報告では予備的な分析として、このコンピレーション・アルバムに載ったものを、世間的に知られ、よく歌われている代表作と基本的に重なると仮に考えることとし、これらの作品のテキストを紹介、分析することとする。

4. 一般向けコンピレーション・アルバム集（カセット4巻）のテキストの分析

歌詞の世界像、救済論、新生、道德観、社会観と社会实践、主題の特徴などについて分析し、福音派讃美の文脈化の一つの「成功例」としての特徴を明らかにする。

コンピレーション・アルバム集は10曲ずつ、全40曲が、1990年代のフィリピン・ポップスの軽やかでシンセサイザーを活用した耳になじみやすいメロウな雰囲気編曲で、すべて男女混声の合唱でのびのびと歌われている。いずれも上記の実験作より以前のものであり、このアルバム集やPapuri!シリーズ本体が一般のレコード店やスーパーマーケットで広く販売され、人気を博していたころのものである。作品及びたどれる限りの出元は以下のとおりである。特に特徴的なことについて、簡潔な説明を付しておく。なお、カッコ内の数字はPapuri!にその楽曲が収録されている巻数を示しているが、いくつかは上記のPapuri!の関連シリーズからの作品も含まれている。

ひとつの歌、ひとりの主 (10)

FEBCのPapuri!の番組のテーマソングであったこともある、代表的な作品であり、シリーズの作家、歌手として代表的な存在であるArnel de Panoの作品でもある。多様性(iba't iba)の中でも唯一(iisa)の祈り、唯一の歌で唯一の神において一致できる、ということが明確に歌われている。冒頭はこうに歌われる。

Isang awit, isang tinig sa iisang Panginoon
Isang bisig isang lipi sa habang panahon
Kay Hesus lahat tayo'y na-uugat
Kahit saan pa magsanga, kahit saan mang lupa
Kay Hesus mapag-iisa tayong lahat…
一つの歌、一つの声を唯一の主に
長きにわたり一つの腕、一つの系譜
イエスにわれらすべてが根ざしている
どこで枝を張ろうとも、どこ地でも
イエスにあってわれらは皆一つとなれるであろう

神は愛であるから (1)

神の愛 (pag-ibig) を歌うが、それが1節では自分たちをお互いに結びつけるということ (pag-ibig ang siyang buklod natin) だから愛し合おうという勧めが歌われ、2節では「愛に飢えたすべての人々を救う神の愛 (pag-ibig ng Diyos na siyang sumakop sa bawat pusong uhaw sa pagsuyo)」を伝えよう、となっており、サビでは「うまくいかないときも、私たちには愛してくださる神がいることを忘れないように (kung tayo'y bigo ay huwag limutin na may Diyos tayong nagmamahal)」とする。

腕を組んでくれる (支援してくれる) 人 (10)

冷たい世間の中でも、僕は君の友達、そばにいて支援するよ、と歌いかける。そして、実はイエスこそが真にそばにいて支援してくれる人 (lubos na kakapit-bisig) である、と歌う。友情からキリストの紹介へと移る伝道の歌である。

あなただけ (9)

救いの体験を描写し、神に向かって讃美する歌。神は城壁 (moog) であり、自由を与える真理 (katotohanan) であり、私が探し求めていた永遠の命に至る道 (daan) である、と歌われる。神である「あなた」に会った後の状態は次のように描かれる。

意味がある (may kahulugan)

神の約束において権利を与えられた (binigyang karapatan)

力 (kalakasan) のある状態

神の膝元で休み (sa Iyong kandungan, doon ako mahihimlay) 神の永遠の愛を感じる

永遠に神が友 (kaibigan) であり放っておかれず見捨てられないことがない (di ako pabayaan, at di ako iiwan)

闇が迫るときも神が光 (tanglaw) となる

悲しみの時にも私の幸福となる (ligaya)

混乱の時に私の平安 (kapayapaan) となる

回心の結果人生が全く変わり、意味のある、明瞭な、救いのある、希望のある、そ

して支えのあるものになった、という喜びを、時に恋愛歌のような言葉遣いと音楽で表現する楽曲はこのほかにもよく見られる。

キリストに捧げよ (5)

献身の歌である。心、人生の「すべて buo」をささげようと繰り返し歌われるが、すべてのことにおいてイエスのために輝こう (magningning) ! と明るいイメージを提示しており、楽曲に悲壮感は全くなく、3拍子でアップテンポ、長調の踊るような曲であるのも興味深い。

まことの神 (7)

明るく輝かしく主イエスをたたえる、昂揚感のある楽曲。神を音楽に例える表現が興味深い。

O Diyos sa bawat himig ng awitin ko
Ikaw ang musika't titik nito
Dinggin ang awitin ng puso ko
Sigaw ng damdamin at isip ko
Ikaw Panginoon, ikaw nga ang himig ko
神よ、私の歌のメロディーごとに
あなたこそその音楽、調べ
私の心の歌を聴いてください
私の気持ちと思いの叫びを
主よ、あなたこそが私のメロディー

不思議な扉 (2)

不思議な扉があって、イエスが扉をたたいている、応答するならひとりでに開く。その声にこたえて、心にあるその扉を開けませんか、と求める伝道の歌。あなたの人生にキリストがいなければ「ぐちゃぐちゃ (混乱, 混沌, 無秩序) (gulo)」になる、という。この gulo という言葉は、讃美の中で、信仰を持つ前の状態として非常によく用いられる。

彼 (1)

「彼 (siya 三人称単数で性別なしなので文脈によっては「彼女」にもなる言葉)」すなわちイエスに出会って人生が変わるという証の歌。イエスに出会う前は、混乱があり (may kaguluhan), 方向性がなかった (walang patutunguhan) が、イエスに会って平安 (kapayapaan) が与えられ、イエスにあっては常に勝利 (tagumpay) があると歌う。そしてイエスは同伴者 (patnubay), 導き手 (gabay), 命の与え手, 真理 (katotohanan), 道 (daan), 永遠に唯一の主 (tanging Panginoon magpakailan pa man) とたたえる。

奇跡の神

人生には多くの問題があるが、そんな時どこに行くのか、と問いかけ、私の神は奇跡の神だ、と神を紹介する伝道の歌。ここでも人々は「行き先を知らない」(di alam saan patutungo) とし、病気 (karamdaman), や問題 (suliranin) に際して、解決については「誰に近づくのか」という問いとなっており、「どうするつもりなのか」という問い方ではない。つまり、問題の解決には、自分でなんとかする、という方向性を前提とせず、問題を持ち込める相手、問題を解決できる相手を探す、という構図が前提となっている。ある意味フィリピン社会にも蔓延しているとされる「パトロン＝クライアント関係」⁶のような非対称的他者関係を前提とした問題設定となっている。

ここで語られる「奇跡」とは「私が信仰を持ってからの変化」である。この自分の変化を「証」の中心におくスタイルは福音派に広くみられるが、フィリピンにおいても1980年代以降影響力を増してきた「ボーンアゲイン」の典型的なスタイルといえる。連呼される「私は (ako)」「私の (akin)」「私を (ko)」が、フィリピンの恋愛歌のスタイル「クンディマン (Kundiman)」流にしつとりと甘く歌われるところに、独特のおおらかな自己愛的な雰囲気も流れるが、うしろめたさやためらいの要素は見られない。

あなたへの何よりの捧げもの

自分のような注目に値しないものに気を留め愛してくださった神への感謝の応答

6 フィリピン社会をこの概念でとらえる通説的な方法は現在厳しい批判にさらされているが、全面的に否定されているわけではない。この概念の古典的な援用として、ホルンシュタイナー編『フィリピン人のこころ』(山本まつよ訳、めこん、1977年)に収録された諸論文を挙げることができる。

として、自分の人生を捧げますから、存分に用いてください、という献身の歌。やはり明るく甘美におおらかに歌われる。

人生の運転手

朝に登校 (pasok) する情景の中で乗り物に乗ろうとし、そこで、そういえば、イエスは人生の運転手だ…と斬新な比喩を展開する。

Gising na naman, kay bilis ng araw

Pikit pa ang mata, bumabangon na sa kama

Kay ganda na naman ng araw kung simulan kong kumanta

また起きた。日の経つのは早い。

ベッドは出たけれど瞼が開かない

歌い始めれば、また何と素敵な日だろう

(中略)

Alas-siyete na, baka ka mahuli sa eskuwela

At marami ng sumasakay patungong Eskolta

Sabi sa Bibliya sa bawat lakad niyo ay…

Si Jesus, siya ang tsuper ng buhay

Dito ka sumakay, gasolina'y pang-habangbuhay

Biyahe mo ay sulit 'pagkat patungong langit

hindi puwede ang sumabit

7時になった、学校に遅刻するかも

たくさんエスコルタ (マニラ市内の繁華街) 行き (のジブニー) に乗る人がいる

(そういえば) 聖書によれば、君たちの歩み毎に

イエスは人生の運転手

君はここで乗りなさい、ガソリンは永遠の命分ある

君のこの旅はお得だ、だって天国行きだもの

「サビット」(つかまり乗り) はできないよ

フィリピン独特の乗り合いバス「ジブニー」をたとえに使い、出入り口の取っ手につかまって短距離を (多くの場合) 料金を払わずに乗る「つかまり乗り」まで出

てくる、フィリピンのオリジナル讃美感を積極的に打ち出した、軽快なナンバーである。筆者はかつてフィリピン語の礼拝で教会員皆で体をゆすりながら楽しく歌った日々を思い起こす。

主よ、あなただったのですね (7)

これも回心の証の歌であり、信じる前（希望がない、苦しみが終わらない、解決を求め続けている、誰が [sino - 何が (ano) ではない] 必要なかと問うている、ひとりになると寂しい、愛されていないと感じる、恐れがある）と信じた後（神が答え、幸せ、希望となる）が対照される。「あなただったの!」(Ikaw pala!), という驚きの表現はとても日常的で、ある種気軽な表現である。軽快で楽しげな曲調である。

私はどこにいただろう? (3)

イエスがいなかったら、私は一体どこにいただろう、と歌う詩的な歌。イエスなき人生は「風に遊ぶ」「どこに行くのか分からない」「時流 (agos ng mundo) に流される」「混乱の極み (gulong-gulo)」「悲しみ」「刷新がない状態」そしてこれに対し「答を求めている」「風に遊ぶ (naglalaro sa hangin)」「まだ風の中にいる (nasa hangin pa)」という定めなきが、長調ながらゆっくりした静かで幾分悲しげなメロディーに乗って、独特の憂愁を醸し出している。

イエス、わが音楽 (5)

イエスに出会い、歌が変わった、という、日本のプレイズにもみられるモチーフがある。以前は神に向かって歌うということに意味を見出さなかったが、今は神が私を贖ってくれたので、心から発する音楽が、あなたを讃える、イエスこそ私の音楽であり、イエスこそ音符に輝かしい喜びを与える、とリズムカルに歌う。

神はあなたを愛している (1)

これも伝道の歌である。ゆったりしたいわば「南洋風」の曲で、ここでも「神の子イエス、彼こそ道、真理、命、神への架け橋であり道である」というヨハネ文書的なイエスの神学的な定義のような紹介が、ほんわりと明るく甘く歌われる。

ふさわしいときに (6)

祈りがなかなか答えられない時に、その理由にハッと気づいた、という形で祈りの教理がのびのびと歌われる。

Hangarin ng Diyos ay sa kabutihan ko
Kailangan Siya ay panaligan ko
Sa tamang panahon kalooban ng Diyos ay magaganap
神の願いは私にとって良いこと
必要なのは私が神を信じること
ふさわしいときに神の御心は成就する
Sa dalangin mo ang Diyos ay may sagot
“Hindi” kapag iba ang nais Niya
Kung minsa’y “maghintay” ang itutugon sa ‘yo
“Oo” kung ito’y layunin Niya
神はあなたの祈りに対し答えを持っておられる
御心と異なれば「いいえ」となり
時にはその答えは「待ちなさい」であったり
御心になえば「はい」となる

私にはキリストで充分 (7)

人生にいろいろの問題があっても、キリストがいれば喜びがあるし、約束を握っていくことができる、だからキリストで充分 (sapat: これ以上必要ない、というニュアンスであって、まあ仕方ない、これで足りるけどね、というような意味合いはない) ののだ、と歌う。

あなたは私に歌を与えてくださった (6)

この曲も神が「歌を与えてくれる」という音楽的な内容がうたわれる。やはりここでも、以前（人生は混沌とし [magulo], 導いてくれる人がなく、問題だらけ、解決努力もむなしという状態）と信じての状態（人生は素晴らしくなり [gumanda], 彩り [kulay] が生まれ、希望に満ち、問題があってもイエスが喜びを与える、イエスが人生の歌、希望の歌、愛の歌を与え、悲しみを取り去る）が対比される証の歌である。

迷える羊

伝道の歌であるが、人生このままいくなら迷える羊だ、と警告する。長調だがゆっくと翳りのある歌である。情景描写をたとえにした詩的な感興に富んでいる。

Malapit na namang lumubog ang araw
 Dilim ng gabi'y darating na naman
 Sa paghimlay mo, isip mo'y naglalakbay
 Nakatanaw sa kawalan
 日没は近い
 夜の闇が再び迫る
 就寝に際し、あなたの思いは彷徨う
 彼方に虚無を見据えつつ

Lumipas na naman ang isang araw sa buhay
 Takbo ng buhay mo'y di mo namamalayan
 Sa bawat sandaling darating at papanaw
 Buhay mo'y tila parang kulang
 人生のひと日がまた過ぎて行った
 足早な人生の進行に気を留めることもなく
 ひと時ひと時がやってきては去っていく
 あなたの人生はどうも何かが欠けているようだ

Kayamanan at lahat ng kalayawan
 Wala pala itong kabuluhan
 Kung si Kristo ay wala pa sa iyong buhay
 Para kang isang tupang ligaw
 富とすべての放縦
 そこには何の価値もないとは！
 あなたの人生にキリストがまだいないなら
 あなたは迷える羊のごとき者

私はそこにいる (9)

イエスあるいは神が「私はいつも君のそばにいる」と励ます歌。歌い手、特に合

唱がイエスのメッセージを聴き手に伝える形となるのも興味深い。

すべてに勝ってナンバーワン

希望のなかった悲しかった人生が、色彩と秩序を得、喜びがあり、問題を抱えても孤独ではない、というありさまに変えられた、と歌う「新生の証」の歌。サビではイエスこそ第1 (una) と反復して una, una, una…とアップテンポで歌う。

イエス (3)

これも伝統的恋愛歌 Kundiman 風で、短調で始まり、主部で長調に転じる。短調の部分で人生の大変さが歌われ、長調の部分で彼こそあなたの必要な方、頼み、友、太陽、共に悲しんでくれる方、と歌われるのも、例えば有名な Kundiman である「あなたのために (Dahil sa iyo)」のような、悲しく苦しかった人生が、恋人との出会いで輝いていく展開と重なっているようにも見える。

休息

サビの部分に有名なイエスの言葉「すべて疲れた者、重荷を負っている者は私のところに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう (Magsiparito kayo sa akin, kayong lahat na nanga-papagal at nanga-bibigatang lubha, at kayo ay aking pagpa-pahingahin)」を置き、イエスは助けてくださるから依り頼もう、と励ます歌。聖書の言葉がフォーマルな文語調であるのは、イエスの言葉が伝統ある荘重なものにとらえられていることを表しているようである。フィリピンの歌の歌詞は詩的であろうとするために、流行歌でも多少文語的であったりするが、この箇所の場合有名な箇所でもあり、それが故に古い翻訳をそのまま入れたということであるのかもしれない。フィリピンにおいては16世紀のカトリックの来訪以来、特に現地語による受難劇 (Pasyon) の成立以来のイエスの言葉やイエスのイメージについての伝統が社会文化に根付いている面があり、それと共鳴するものでもあるだろう。そうした古さをもつ言葉がこのポップス風のメロディーに乗って歌われるのも興味深い。

愛こそが鍵

社会における不和の問題を取り上げ、愛こそが私たちを連帯させる鍵だ、と歌う、社会的なアピール性の強い、福音派のプレイズとしては斬新なものであるが、

1980年代以降、そうした社会的なアピールを持った歌は、カトリックやプロテスタント主流派教会のみならず、福音派の中でも現れてくるようになった⁷。

Umiiyak ang bata sa langsungang
 Ang magkalahi ay kapwa nag-aalitan
 May galit na laganap, at may mga nag-papanggap
 Sadyang ganyang lang ba ang buhay?
 子どもが通りで泣いている
 民は皆争いあってばかり
 至る所に怒りがあり、要求の声が上がる
 人生とはこのようにしかないのか？

Kung sino-sino na ang aking nasisisi sa lahat ng mga nangyayari
 Ang bigong mga pangako ay 'di mo na maitatago
 Lalo lang lumalala ang sugat na hatid
 Kaligtasa'y kailangan na
 Pagkat naghihintay sila sa ating pagkaka-isa
 すべての出来事に対しあれこれの人々を責めるなら
 果たされなかった多くの約束はもう隠すことができない
 傷は悪くなるばかり
 救いこそが必要だ
 私たちの一致こそが待たれているのだから

Pag-ibig lang ang susi ng lahat
 Ang siyang magbubuklod sa 'ting lahat

7 福音派の政治社会参与及びフィリピン文化の文脈を重んじ、文化活動の大切さを強調した「アジア教会文化研究所 (Institute for Studies in Asian Church and Culture)」も、1988年と1992年に Samba (礼拝あるいはワーシップ) という歌集をカセットアルバムと共に2冊出版しているが、こちらは主に聖歌隊向けの芸術音楽的なより大きな作品が収められている。これもまたフィリピン文化と社会問題を意識した作品をいくつか収めている。ISACC 自身、FEBC とは緊密な関係を築いており、レギュラー番組を持っている。ISACC については公式ウェブサイトを参照。〈<http://isacc.org.ph/>〉 2012年8月9日確認

Hawak mo kaibigan ang isang kapangyarihan na magbubuklod sa ating lahat.

愛こそがすべての鍵

それこそが私たちすべてを結びつける

友よ、私たち皆を結びつける権威をつかみ取ろう

大いなる愛 (4)

神の救い、その大いなる愛をのびのびと讃美する歌である。

互いに愛し合おう (6)

ヨハネの手紙第1第4章からテキストが採られている。ここでも聖書の引用はフォーマルな文語である。明るくアップテンポな曲調が荘重な歌詞に軽やかさを与えている。

ひとつの詩編 (8)

タイトル通り、聖書の詩編を思わせるような、神をひたすら讃え、信頼を表明する落ち着いた曲調の歌である。

宣教師 (11)

この曲は宣教師の働きを描写するユニークな作品である。しかもアップテンポで、宣教師の働きが充実した楽しいものとして歌われているように聞こえる。

Walang tigil sa paghakbang sa patag at kabundukan
Sinasaliksik maging pook na liblib upang ang aral ay maihatid
平地でも山岳でも、歩みを止めることはない
隠れたような場所までも調べ上げる—教えを届けるために

Buong tapang na nangangaral kahit saan pa man mapadpad
Pag-ibig ng Diyos inihahayag sa bawat taong makaharap
勇敢にも、どこに流されていこうとも宣べ伝える
眼前のあらゆる人々に神の愛を語り伝える

Siya ang misyonero
 Siya ang tunay na kawal ni Kristo
 At makikita sa kanya ang kagalakan
 na maibalita ang Ebanheryo sa buong sanlibutan.
 彼／彼女は宣教師
 彼／彼女こそ真のキリストの兵士
 世界中に福音を宣教できるという
 その喜びが見て取れるだろう

私たちは神を讃美する

自然の情景の美しさ故に神を讃える、という讃美。その南国風のゆったりとした甘い調べによって、自然描写がとてもローカルな雰囲気醸し出している。

大いなる誠実

神の永遠の誠実を荘重かつドラマティックに讃美し、神に生涯の忠誠を誓いつつ壮大なクライマックスを築く劇的な作品で、作者 Arnel de Pano のソロ版と並んで、合唱版による讃美作品としても教会でよく歌われる。サビの部分は以下のとおりである。

Dakila ka, O Diyos
 Tapat ka ngang tunay nagmula pa sa ugat ng aming lahi
 Mundo'y magunaw man, maaasahan kang lagi
 Maging hanggang wakas nitong buhay
 神よ、あなたは偉大です
 われらの種族の始原以来、まことに誠実です
 世界が崩壊するとしても、いつもあなたに希望を置きます
 この命の終わりまでも

讃美の歌

アップテンポの楽しい讃美歌。神が愛してくださるから讃美の歌を歌おう、と呼びかける。主が一緒にいてくださるので喜びがあり、問題が解決し、讃美があふれる、というとても楽観的な明るいトーンの歌詞で一貫している。

新しい創造 (4)

キリストを信じれば、人生は刷新される、と歌う。これもアップテンポで楽しい歌になっている。

神は生きておられる (11)

君の人生は混沌としていて (may gulo) 困難が終わらない、私思うに、それは君に足りないものがある、キリストからの救いを受け入れていないということだ、悔い改めて刷新されれば神の愛を受けられる、と未信者を説得するモードがそのまま歌われているユニークな歌。さらにこれほど素晴らしい救いを受け入れない君の心は石のようにかたくなだ (parang bato), と畳み掛ける。そして神は生きておられ、あなたの心の扉をたたいているから、心を開こう、と呼びかける。音楽は落ち着いたトーンである。

あなたは驚嘆すべき方 (8)

罪びとの私に愛を注いでくださるとは、なんと神は驚くべき方か、と讃美する。ゆったりとしみじみと歌われる。

私は従います (2)

従う (sumunod) という動詞の活用形が反復される信徒 (献身) の歌。従う、と決心した時、神の愛によって刷新され、悲しみを除かれ、希望を受け取った、と歌う。

私はすべてをささげます

これも献身の歌だが、驚くことにサンバ風のきわめて明るい踊りの音楽である。以下のサビの部分はもうこうなると踊るしかないというリズムカルそのものの音楽である。

Lahat, lahat ay aking ibibigay

Ibibigay pati aking buhay

Upang purihin Siya

すべて、私はすべてをささげます

自分の命 (人生) だってささげます

主を讃美するために
求めよ、探せ、叩け (7)

サビの部分に有名なマタイによる福音書7章7節「求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます」が引かれている。これもアップテンポであり、歌詞の内容と結びついてとても明るく楽天的な響きができる。

もし君が望むなら (2)

信仰を増し加えられたい、優れた模範を残したいと願うなら、主を第1とし、主を見つめよ、とアドバイスする歌。

心の底からの感謝

しっとりゆっくりと甘美に、救いを与え、刷新を与えてくださった神の親切を心の底から讃える、という歌。

彼をたたえよ (1)

周囲を見回し、鳥や花が神の愛を歌っているなどの素晴らしいものを見出し、だから神に讃美し、感謝しよう、という歌。

以上、特に最初の方の巻に重心を置きつつ、特徴のあるものを中心に作品を紹介してきた。その中で、いくつかの興味深い特徴を概観すると、

- (1) 未信者を信仰に招く歌が多い、また信じない者への警告の歌もある
 - (2) 信仰をもった結果人生ががらりと変わった、という歌が多く、自分の変化こそ奇跡で、神のおかげだ、という語りになる
 - (3) 献身の歌や献身した生き方についての歌がある
 - (4) フィリピンの音楽文化や詩の文化を踏まえた歌も積極的に作られている
 - (5) 社会的な問題関心がうたわれるものもある
 - (6) フィリピンのライフスタイルや環境を踏まえた斬新な描写や比喩も見られる
 - (7) ラブソングと神への愛を歌う歌の親近性
- といった点が看取される。

総じていうと、アイデンティティの表現が明確であり、積極的に外に向かってアピールし、また社会とのかかわりの中で、個人のみならず教會的なアイデンティテ

ィの形成が歌われ、新たな文化創造のエネルギーを感じさせる。日本における海外作品の翻訳導入への依存度の高い『リビングプレイズ』などと比べると、オリジナリティの高い Papuri! には信徒、教会、キリスト教運動の積極性とダイナミズムを看取することもできる。ただ、より公平な分析をするにはもう少し多角的なデータの突合せが必要であろう。それはむしろ、讃美歌や礼拝の研究を専門とする研究者、実践家が行うべき作業であるとも考える。

5. 最後に—今後に向けて

Papuri! アルバムは巻数も多く、時期も長きにわたるため、全体を一度に分析するのは容易ではない。そのため今回は、一般に反響の多く人気があると思われる、コンプレッション・アルバムに含まれる楽曲とその歌詞の分析に限定した。

今後は時期やテーマに分けてテキストのより詳細な分析を行うとともに、Papuri! シリーズのフィリピン諸教会や FEBC におけるより詳細な位置づけの調査を進めていきたい。またはじめに述べたとおり、フィリピン福音派の特徴や動向については引き続きサブテーマとしてではあるが追い続け、適宜まとまったところで公表し続けることができれば、と考えている。

[参考資料]

- Aragon, Averell U. (2001) The Philippine Council of Evangelical Churches. in Kwantes, Anne C. *Chapters in Philippine Church History*. pp. 369–389. Mandaluyong City (Metro Manila): OMF Literature.
- Navaro, Joel. (2001) Music in the Philippine Protestant Church (1960–2000). in Kwantes, Anne C. *Chapters in Philippine Church History*. pp. 451–462. Mandaluyong City (Metro Manila): OMF Literature.